木下杢太郎全集

第十六巻

木下杢太郎全集 第十六巻　第十九回配本（全二十四巻）

一九八二年一一月一八日　発行

定価 三七〇〇円

著者　太田正雄

発行者　緑川亨

発行所　〒101 東京都千代田区一ツ橋二-五-五
株式会社 岩波書店
電話 〇三(二六五)四一一一
振替 東京六-二六二四〇

印刷・三秀舎　製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

© 太田元吉 1982 Printed in Japan

目　次

眞畫の物のけ……一
僻郡記……八
續僻郡記……二九
鷗外全集著作篇刊行の辭……五一
眞　贋……五三
森先生の人と業と……五四
郡虎彥君……六八
鷗外先生の評論と史傳……七三
歐羅巴の留學から歸つて來た當時の森鷗外……七四
鷗外全集著作篇後記……八七
科學通信に望む……一二五

十九世紀末佛蘭西に於ける獨逸主義の勝利……一一六
横組・縱組……一三二
フランスに於ける教育改革……一四三
醫學部の學生諸君と僕と……一七六
マニラ記……一八二
露伴先生の文化勳章を得給へるを祝す……二〇〇
昭和十二年の院展及び青龍展……二〇三
ことばの泉　心のかて……二一一
原書と翻譯……二一三
我々の醫局に在りし日の土肥先生……二一七
國字國語改良問題に對する管見……二三七
小網町・深川八幡……二五八
一水會展覽會……二六一
銀杏とGinkgo……二六八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

持つげ
の一車
た元
の一紙
朝び
は巣
につ
が烏

Raimond Sabouraud 先生ノ訃 ……三六九
鷗外先生の翻譯 ……三七五
鷗外全集翻譯篇後記 ……三七八
昭和十三年の院展及び青龍展 ……三九〇
Jean Darrier 博士ノ訃 ……三九七
入澤達吉先生 ……四〇一
上林豐明教授ノ遠逝ヲ悼ム ……四〇六
上林豐明君を追懷す ……四一一
後　記 ……四二五

汽車の窓をかすめる夏の杉は青く、竹の叢はういういしくなだらかである。木立の間に白壁の家も見える。車室のうちに、ひとりのさまで壯からぬ士官が居た。その襟の色が有り觸れたので無い外には、内も外も、見る所に何の奇も無く、をととひも昨日もかく有つたらうと思はれた。忽ち士官が窓から首を出す。すると下の道に立つて居る人々が手を擧げた。士官はわたくしの目の前に既に孤立した一形態では無くなつてしまつた。汽車が止つた。士官は停車場の月臺に下りて行つた。

*

波路の距(へだたり)が遠い。ほのかな光の裡に、遙に白いせのが見える。物かげは時々動く。近(ちか)づいてそれを見、觸感を以て確に檢めて見たいと思ふ。わたくしの手はどうしてもそこまでは屆かなかつた。此夢まぼろしの感覺はわたくしに取つて決してめづらしいものでは無かつた。然し今のは最後のもので、その餘感がまだありありと生きて居たから、わたくしは「鬼(き)」と名付けたいその一片の白影を視域から逸すまいと——無論この瞬刻、車室のうちで——努力したのである。

*

いろいろの物象が有る。美しい花を開き、好(よ)き音色を立てる。いくらでもいくらでも有る。一體それは何の爲めに有る。そのたつた一も自分とは關(かかはり)が無い。

*

牡丹の花と芍藥の花と、何かよく似た所が有る。また其間に差別が有る。芍藥の花と葵の花と何か似通つた所も有る。其間に差別も有る。牡丹の花と葵の花とどこか似ぬことも無い。その間に差別は有る。だがその差別をもつと好く知らうと思つて、その一つ一つの形には迷ふまいぞ。牡丹にもどくだみにも、この人間の眼をさへ誘はうとする何か共通の力が有る。その力にも誘はれまいぞ。牡丹を捨て芍藥を捨て葵を捨てよう。そして遂にどくだみをも捨てよう。昔の賢者は差別を去つて典型を求めようとした。或は邪見は目故であるとて其目をくぢり取つた者も有る。わたくしにはさう云ふ猛い求道者の勇氣も、賢人の諦念も無いから、唯悲しみながら、窓の無いいほりの裡に棲はうと思ふ。

*

さらばと心を定めて踵を返さうとする。あとに人聲らしいものが聞えるやうに思はれる。また江頭に戻つて往つて叢間を視るに、いづくにも舟らしいものは見當らぬ、ましてや人の姿をや。わたくしはまた踵を返へす。するとこのたびは明な聲で、舟が有ります、川を渡してあげませうと云ふのが聞かれる。わたくしは勇んで——然し果して危惧の念の之に雜るものが無かつたであらうか——また河岸の土手を下つた。月は既に沈んで、水光さへも見分け難かつた。わたくしは再びもとの道に歸る心さへ失つて、くさむらのほとりにつぐらんだ。

*

小庭に人が下り立つてわづかばかりの水鉢の水を空に蒔いた。雲を漏れた日あしが折好くも水を浴びたまばらな木の葉に當つた。それと共に何かきらきらしたものが空から落ち散つて、わたくしはそれを小雨(こさめ)かと思つた。だがそれは雨では無かつた。その瞬間にわたくしは目をつぶつて、雨の錯覺を起した物の何であるかを窮めようとする根原を塞いだ。そして出來ることなら、その人、その時をも忘れようと試みた。何もさうつとめて試みるには及ばなかつた。明るい窓を見たあとの後覺の如く、あれほどあざやかであつた幻像も數時の後にはやがてぼろぼろになり、亂れ黑んでしまつた。

*

鶺鴒よ、わかい樫の葉のすきから、石のうへにたもとほるお前の姿がふと目に入つたから、僕は發句を一つ作つて、思ひ設けぬ賜物(たまもの)と殊の外に喜んでゐる。だがこの發句とお前とは何のかかはりが有らうぞ。その爲めお前が飛んで來て僕の手の上に止つたのでも無い。それを緣にお前と僕と——所詮出來る筈も無いが——話を取りかはしたわけでも無い。しかのみならず、もう今はお前の澤からは汽車は一里餘も離れてしまつたかも知れない。だがこの發句はたしかに僕の物だ。始めはあつたらしいお前のキジオンももうその句のうちからは消えてしまつたが、それでもこれは僕の物

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

だ。そして謂はばお前が吳れたのだ。僕はその句をここに書き記さうかと思つた。かき記してもさまで拙ならぬ句ぶりであると思つたから。だが鶺鴒よ、こんなにも變つてしまつた別物を人に知らせたとてそれが何になる。藝のうまいまづいで誇る氣も今更有りはしない。僕は今作つたばかりの發句をはやく忘れてしまはうと思つて遠いい山際の雲を眺めてゐるよ。書き附けて置かない自分の發句を、僕は三日と覺えてゐたことがない。

*

大都。昨日それを見た。をととひも見た。汽車の窓のずつと下に、木立の間に一軒家が見える。三四人の人々が仰いで汽車を見迎へてゐる。大都よ、僕は君に言ふ。名の無いと云ふことが、かたみをあとに殘さないと云ふことが、そして人に與ふる影響が微かであると云ふことが、そこに命が無いと云ふことでは無いぜ。大都、その大新聞と、無數の雜誌、書籍を持ち、作り、吐き出してゐる大都よ。昨日君のさはがしい爆音の間に、僕はむしろなつかしみつつ聞き澄んだ、德島の異國詩人のかすかな笛の音を、むかしむかしの宗祇の老いだみたつぶやきを。わたしは汽車を見送つてゐる人々に心からの挨拶を投げてやつたよ。

*

遠い青畠の上にひとりの百姓が腰をかがめてゐる。汽車の窓から首を出して、視線の限を追うた

が、百姓はなほも依然として其からだを動かさなかつた。わたくしの瞳底にはそれが百年の岩のやうな黑いかたまりとして殘つてしまつた。ふとわたくしは驚いて心の中で言つた。わたくしがふだん岩だと思つてゐたものが、事によると百姓だつたかも知れないぞと。

*

夕闇が山を罩めて、目の前の庭の白い花さへも見えなくなつた時に、庵に住んだ昔の隱遁者は始めて安心したでもあらう。それでも小さい燈の下でなほも文を讀むことが出來たでもあらうか。文字の形が目にうつつたら、故鄕の花、みやこの人の姿がまた音づれて來て、日の暮れた甲斐も無かつたやうなことは無かつたか。高嶺の風の音さへまつといふ心をおこさせはしなかつたらうか。だが——すきごころの動きを書きとめるばかりが文字の役では無かつた。古い連歌の帖をうちすてて、棚から久しく忘れてゐた觀音經を取り出して、そして短檠の暗きをうちわび、また物の見える日の光を戀ひもしたのではなかつたか。然し、幾人の人に果してその喜びが不斷の法悅となつたであらう。夕となればまた早くあいろも分かぬ夜の來るを待ちかねて、門に立たなかつた人は果して幾人あつたであらうか。

*

ああここにかう云ふものがあつたかと、始めてしみじみと古への白河城の石垣をうち眺めた。既

にしてうすき滿月。田中の道を小さい提灯がゆれゆく行く。

（昭和十年七月）

僻郡記

壹

昭和十年一月十七日

その現場の小學校に往く途中、赤十字社の佐藤氏が車中で語つた。千圓位の價の有る田地を五百圓位で讓つて、そしてその五百圓が出來たら田地と引換にすると約束する。無論五百圓は、始めから利子が差引かれてあるのである。結局金が出來なくつて田地は戻らない。この數年以來かう云ふ例は此地方に著しく殖えて來た。

百姓には借金の有るものが多い。そして借金が幾許有るかと尋ねると、之を隱して答へないのが普通である。然し少し金廻りが好いと浪費する。

一家で十反歩小作する百姓は殆ど無いであらう。先づ五反歩位か。其半分は自分の手に入る云々。

之より先、一月六日夜に一客が用事で余を訪ねて來た。その人は地方の事情を知る人であつたから、用談の後にいろいろと質問した。その人の話に據ると、一反歩からは平年、籾二石五斗が取れ

る。凶年には二石、今年は一石八斗位である。（米とすると籾の半分になると見て可い。）然し今年は、世間で評判になつたその所謂冷害よりも、繭の値の安かつたことが、農村に取つて、一層大きな痛手であつた。

我々が二三年前、數箇部落に於ける或る特殊の疾患の疫學的研究を爲す機會で、調査部落の一家の收入を平均的に概算したところ、七百四十圓と云ふ數を得た。その客の意見では此平均額は過大に過ぎると云ふ。然し年七百四十圓の收入の一家としては、十反歩位は田が作られよう。だがそれには十人位の手が入用である。十反歩中三反歩の收穫は自家の有とならうと。

余は今まで凶作の、冷害のと、唯新聞で窺ひ知つてゐるばかりであつたが、地方の都會に住むこと九年にして、始めて少し身を入れてさう云ふ話を聞くやうになり、今日はまた始めて實際目を以てさう云ふ部落を見るの緣が結ばれた。そしていろいろな初心者的の疑問が蜂起した。

少し雨の氣を含む重陰の空である。道傍の百姓家は皆戸を閉ぢてゐる。それを、佐藤氏に尋ねると、此邊は冬は皆さうであると云ふ。「障子なんか有りやしないのですから。」とさう佐藤氏は說明した。

長塚節の「土」の冒頭の章に「朝から雨戸は開けないので內はうす闇くなつてゐる。」と云ふ敍述がある。冬の間農家が雨戸を立てこめて置くのは、鬼怒川の沿岸地方でも同樣だと見える。

嚮に述べたやうに、我々は嘗て或る特殊の衞生學的研究の爲に、その環境を知る必要が起り、數部落の四十四戸に就いて其生活の狀態を調べたことが有つた。四十四戸中宅地の乾燥せりと見做されるものは十九で、他は皆陰濕の地に在つた。日光照射の良好なるものは三十七戸であつた。一屋の三室より成るものが多きを占め、二室のものも少からず(九戸)あつた。二室のものは、一は納戸、一は臺所(兼居間)で、三室のものは、この他に表間とも稱すべき一室を有するのであつた。納戸は六疊敷、八疊敷、或は更に大きく、ここには多くの場合晝夜寢具が引き放しになつて居る。臺所は概ね十疊ばかりの廣さで、圍爐裡を中心に二三枚の疊を敷き、あとは板の間であるのが常であつた。家人の團欒するのは、主として此室であつた。表間の有る場合には、それが應接間にもなり、仕事場にもなつた。便所は大抵離れて建てられてある。臺所の側には土間が有る。またこの母屋から離れて、農具、牛馬等を置く納屋の有るのが屢〻であつた。

納戸は、疊敷で十枚以內に當るものが二十五戸、二十枚以內のもの十九戸。之を家族の數に割り當てると、一人當り疊一枚なるが十戸、二枚のもの三十一戸、三乃至四枚のものが三戸であつた。

臺所は寢室に用ゐることは稀で、疊數として目算するに、十枚以內のもの三十三戸、二十枚以內のもの十一戸、之を一人當りにすると、一人一枚のもの十三戸、二枚のもの十九戸、三枚のもの九戸、四枚のもの三戸であつた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com